第二章　仏典に説かれる功徳と廻向のしくみ

藤本　晃

はじめに

「功徳」とか「廻向」などという言葉は、厳密にいえば仏教用語ということになりますが、仏教に接しているつもりではなくても、日常的に皆さまもけっこう耳にしたことがあるのではないでしょうか。

仏教とか宗教のことは、明治維新のときと、さらに戦後の政策で、何でもかんでも公共の場ではタブーみたいになってしまいましたけど、日常生活の中で、どうしても江戸時代以来の仏教的、宗教的な慣習や文化が出てくるものです。どなたかが亡くなったときとか、故人の事績を顕彰するときなどは、「故人の遺徳を偲んで」とか、「顕彰碑を建てて故人の徳と志を受け継ぎ分かち合って」などと、どうしても徳（功徳）というものが出てきます。そしてそれは遺された人々が偲んだり分かち合ったりするものなのです。そして誰かの（遺）徳を分かち合い広めることは、じつは徳を廻向しているのです。

日本だけではありません。じつは私は、数年前の京都大学地域研究統合情報センターでの研究会で伊東先生や東南アジアがご専門のたくさんの先生方に出会うことができました。それで、

付け刃ですが他の宗教や同じ仏教でも東南アジアや中国や他の地域でのあり方を勉強させてもらっています。特に東南アジアで仏教が日常生活にしみ込んでいるあり様は圧巻です。そういう国々では、何か善いことをして「功徳を積む」ということは、もうあまりにも当たり前の考え方というか生き方になっているようです。仏教以外の宗教でも、それこそ人間生活のあるところでは世界中に「徳を積む」とか、積んだ功徳を「分け合う」とか誰かに「あげる」というか「廻向する」ということも当たり前におこなわれているのではないでしょうか。

仏教の日常生活としては功徳を積むことも積んだ功徳を他者に廻向することも当たり前に見られる行為なのですが、しかし私が研究テーマとして関心を持った問題は、功徳廻向のしくみはどうなっているの?ということなのです。「自分の功徳を誰かに廻向して、その相手に受け取ってもらえるのか」とか、「廻向された功徳を相手が受け取るということは、廻向した人の功徳がその分だけ減るということなのか」などという、そのへんのしくみが分かれば、もっとすっきり納得して功徳廻向できるのではないかと思います。

そしてそういうしくみのところまで解明しているのは、手前みそですが仏教だけではないかという気がします。今日はそういう仏典に説かれた功徳廻向のしくみをご紹介したいと思います。

一　インド文化圏での功徳と廻向

「功徳」とか「廻向」という言葉は日本ではなんとなく仏教用語ですが、それは「功徳」や「廻向」という観念が仏教と共に日本に伝わったからです。インド文化の中では釈尊が世に出る前から、善行為をして「功徳」を積むことは実践されていました。

功徳を積む行為で一番ポピュラーなのが、バラモンたちの宗教儀式です。

バラモンたちには謎が多いです。現在のインドでは、バラモンたちの立場は悪名高い身分差別制度「カースト」の最上級として健在です。そしてその立場は、かなり以前、遅くとも近世・近代の西洋人がインドに接した一五、六世紀にはすでに確定していたように見えます。その当時以来西洋にも伝わっているもっと「古い」インドの文献からは、それよりもっと前からバラモンたちの立場が確定していたように読めます。

しかしより正確に知ろうとすると、バラモンたちがいつ頃どこからどういうふうにインドに現れて、しかも自分たちを王族よりも上だと主張するカースト身分制度を吹聴して、その上、それをどうやって他の「低位カースト」の人々にも納得させ得たのか、未だに不明瞭なままなのです。

少なくとも、釈尊が世に現れた紀元前六～五世紀にはまだ、バラモンたちは「最上級カースト」として威張れるほどの立場を持ってはいませんでした。「在家のバラモン」たちは、バラモンた

ちと同じ「アーリア」系のマガダ国やコーサラ国などの王家に大臣として就職したり、長者の家庭の教育係やご意見番として就職したりして、自分たちの「知見」を売りにして有力者にお仕えするのに一所懸命でした。

一方、宗教者としての「出家のバラモン」たちは、これまた王家や長者など有力者を対象に、さまざまな儀式を司祭して「お布施」というか「報酬」を得ていました。出家のバラモンたちは、王家や長者などの施主に対して、さまざまな種類の儀式をおこない、それによって徳を積み、その徳を何かのために「廻向」しましょうという、現在の大方の宗教に共通に見られる儀式をおこなっていました。王家に対しては主に国家鎮護の儀式を、裕福な家庭に対しては誕生祭、結婚際、家の新築祭、もちろん葬儀などなど、さまざまなシチュエーションに応じて、バラモンたちが独自に式次第を定め、その次第に則って儀式を施主たちがおこなうことを勧め、実際にバラモンたちが司祭して儀式を執行していました。

バラモンたちは施主になれる資格にも口を出します。国の儀式なら国王が施主。これは分かりますが、家庭なら家長または跡取りたる長男だけが施主になる資格を持つと決めています。バラモンたちの教えでは、家長あるいは跡取りたる長男以外の人が儀式の施主になっても、功徳にならないと考えているようです。また、各儀式にはそれぞれ犠牲にされる（殺される）動物の種類や数が決まっています。その上、バラモンに対する「お布施」というか「報酬」の「額」も決まっています。

そういう面倒くさくてしかも動物を殺して、おまけに「報酬」は高額でという負担の多い儀式の次第をバラモンたちは事細かく決めて、その上、その式次第を定めた、最初は口誦で伝えられたテキスト（ヴェーダなど）を門外不出にして、自分たちバラモン階級にだけ儀式執行とその「報酬」を受ける権利があると定めました。えらく高飛車なのですが、どういうわけか、徐々にそれをインドの他の「カースト」の人々にも納得させていったようです。

そのバラモンたちが、釈尊の時代にも、「長男なら先祖のためにこういう供養をしなさい」とか、「あなたの家が繁栄するようにバラモンたちにお布施しましょう」などという儀式をいろいろやっていました。そうすれば功徳が得られるということは、バラモンだけでなく施主にも、共通認識ができていたのです。

自分への廻向

しかし、いろいろな儀式をつくったそのバラモンたちは、自分の儀式によって生じた功徳を他者に廻向して「心のおすそわけ」をすることまでは考えが及ばなかったかもしれません。

一つ、例をあげます。現在あるリグ、ヤジュル、サーマ、アタルヴァという四種類のヴェーダ聖典のうち、釈尊の時代にはリグ、ヤジュル、サーマの三種類は成立していたようです。ただし、現存するものと同じほど確定していたかどうかは分かりません。第四のアタルヴァ・ヴェーダは、釈尊の時代にはまだ存在しなかったようです。最初期のパーリ語の仏典にはバラ

モンたちの聖典はいつも「三ヴェーダ」と言われていて、四つ目が言及されていないのです。

その、釈尊の時代、紀元前六世紀には何らかの形ができていたであろう三種類のヴェーダのうちの一つ、『ヤジュル・ヴェーダ』のなかの「マイトラーヤニー・サンヒター」に、「私が徳を積む先祖供養祭（シュラッダ）の効力（功徳）は、他者ではなく私自身にもたらされるように」と、せっかく積んだ功徳を他者に廻向したくないような表現が出てきます。ちょっと長いですが、和訳と、続く和訳者の解釈を引用します。私が注目する場所に下線を引いています。

我々はそれを知らないのだ、我々がバラモンであるのか、或いは非バラモンなのかを、我々がその者の［子孫］である（その者に帰属している）と自称している、そのṚṣiの［子孫］なのか、或いは他の者の［子孫］なのかを。しかしながら、ある者の［子孫］であると自称しながら（祭主として）祭るならば、その者（＝始祖であるṚṣi）へとその祭られた［祭式の効力］はやって来るのだ。別のある者の下に従属することはない（ūpanamati）。それ故、「Hotṛ祭官」選びが行われている時に、言う（唱える）べきである：「父祖たちである神々よ。神々である父祖たちよ。私がそれである者、その者としてありつつ、私は（祭主として）祭る。私がそれである者、その者としてありつつ、私は行う。めでたく私により祭られたものと、めでたく努められたものと、めでたく行われたものとなってほしい」と。他ならぬその場合には、誰であれ、そのような者として

ありつつ祭ると、その者（祭主当人）へとその祭られた「祭式の効力」はやって来る。別のある者へ従属することはない。

自己と先祖を結び付けるマントラを唱えているAdhvaryu祭官の傍らで、祭主自身は自分が先祖とは異なる現在の自分自身であり、従って自己の祭式と贈与の効力は先祖へではなく自己にのみ帰属すべきことを言明する。ここでは祭主と先祖とのidentificationの問題が祭式・布施の効力の帰属という観点から鋭く意識されて取り上げられている。祭主は祭主自身であって先祖ではなく、その（祭式）行為の結果は行為者、すなわち祭主にのみ帰属するという個人主義が徹底されており、後に大乗仏教で発達する「廻向」（pari-ṇāma-）の概念との顕著な対比を示す。[1]

「祭式の効力」つまり儀式の結果得られる功徳が、儀式をおこなった自分にだけ得られてほしい、たとい先祖であっても、自分が積んだ功徳が第三者にもたらされてほしくないという気持ちが表れています。「廻向」とは反対方向の気持ちです。

釈尊の時代より少し前から、儀式によって善い結果、効力とか功徳が生じることはすでに認められていますが、その功徳を他者に廻向することまでは考えが及んでいなかったかもしれません。

あるいは、うがった見方をすれば、他者への廻向が考慮されていないのではなく、むしろ逆に、せっかく自分がつくった功徳が他者に移行して自分のものにならないのは困る、きちんと自分（だけ）のためになるように、と願っているのかもしれません。「私の祭式の効力は他者ではなく私自身にもたらされるように」というふうに祈っているとすれば、功徳が先祖とか他者にもたらされるという可能性が前提になっているのかもしれません。つまり、私が祭式をおこなって功徳というか「効力」をつくったのだけど、その「効力が私でなく先祖とはいえ他者に移って自分にせっかくの効力がもたらされなくなるのは嫌だ」ということがここに含意されているかもしれません。その場合は、むしろ廻向が前提になっている、あるいは、功徳とか善行為の「効力」というものは、広まるのが前提になっているのではないかとも考えられます。せっかくの自分の「効力」が他者にまで拡散されるのは困る。きちんと（来世の？）自分にだけ届け、というのは、ぼんやりしていると功徳が他人にまで広がってしまうということが前提になっているようにも読めます。

また、これは次の例とも重なりますが、ここまで熱心に自分の「祭式の効力」が自分にだけ「帰属」することを願っているということは、「祭式の効力」を何か物質的なものと考えていた可能性もあるでしょう。つまり、せっかくたくさんの「お布施」をして「祭式」をしてつくった「効力」というか功徳が、先祖であれ誰であれ、第三者に「帰属」してしまうと、自分には「帰属」しなくなると考えられているように思えます。少なくとも、他者に広まった分だけ、自分

の取り分は減ってしまうと考えられていたように読めます。

功徳は物質か

現代インドのヒンドゥ教がいつごろ成り立ち、どれほど「バラモン教」の流れを汲んでいるのかは分かりません。少なくとも聖典は「バラモン教」のものと違います。バラモンたちはヴェーダやウパニシャッドなどの門外不出の自分たちだけの聖典に依っていましたが、現代のヒンドゥ教では『マハーバーラタ』や『ラーマーヤナ』などの物語が「聖典」になっているようです。また「ヒンドゥ教」と言いながらも実態はさまざまな「宗派」に分かれていて、お互いに別の宗教ではないかというほど違います。変幻自在のインドの神のどれか一つのキャラクター、シヴァとかヴィシュヌなどを一つ選んで、例えばシヴァ派はシヴァ神を、というふうに各宗派の主神として祀っているようです。

同じような現象は仏教でも見られます。釈尊の教えに基づく仏教からいつの間にか大乗「経典」があちこちで制作され、各大乗「経典」に基づく大乗諸宗派が現れ、同じブッダ（覚者）ながら別キャラクターの大日如来とか阿弥陀如来などを各宗派で本尊としているのです。

宗派は分かれても、功徳や廻向という、より日常的な宗教観念に対する見方はあまり変わりないようです。『マハーバーラタ』という、ヒンドゥ教の聖典になっている物語があります。いつできたのか分かりませんが、原書の形は紀元前五世紀ぐらいからで、今の形のように完成し

たのが紀元後五世紀頃ではないかと言われています。千年かけてつくられた物語です。その中に功徳についての考えも見られます。原實（東京大学名誉教授）先生によりますと、その功徳とは、実体的、物質的なものだと捉えられていたようです。

彼ら聖仙・行者が善行・苦行（tapas）を修すると、それはそのまま彼らの倉庫に納入・記帳され、その出納簿の収入の部は漸次増加してゆく。而してこの倉庫納入の間に「苦行（tapas）」は「神秘力（tapas）」に転換し、それが次第に蓄積されることとなる。それは恰も通貨の如きもので労働は金銭に還元され、金銭は更に銀行に預入される如くで、塵も積って山となる時、それは大きな購買力となるのに似ている。斯くてtapas（power-substance）は漸次蓄積されるに及んでvara（力）を与え得る能力となる。

併しながらこの「苦行（tapas）－神秘力への転換」、及び神秘力としてのtapasの「蓄積」はひとり聖仙・苦行者自らのtapas（苦行）にのみ依存してはいなかった。彼らは又他人からそれを貰い受けることも可能であったのである。それは、tapasが「実体」（power-substance）として、移行・譲渡（transfer）せしめ得るものであった故である。[2]

功徳を積むための善行為として、ここでは在家施主の布施や報酬ではなく、行者の修行というか苦行が挙げられています。そして「功徳」という言葉は出ず、同じtapasが徳を生むための

苦行でもあり、苦行によって積まれた徳でもあると、二義を持ちます。これはインドの言葉ではよくあることです。インドでは業の観念が当たり前になっていて、行為とその結果が同じものとみなされ、言葉も同じものを使うことがよくあります。主に善行為の結果としての功徳・福徳を意味するpuñaが、福徳を積むことになる善行為・福業の意味でも用いられます。

この事例で面白いのは、苦行という善行為の結果として生じた功徳tapasを、物質というか金銭・通貨というかポイントみたいに貯めたり遣ったりできると考えられているところでしょう。時代が下っても、バラモン・ヒンドゥ教の伝統では功徳は物質的に捉えられているようです。

しかし苦行という善行為の結果・功徳が物質的なものなら、「どこ」に貯まるのでしょうか。物質ならば、保管「場所」が必要です。苦行者の身体に「ある」ならば、その苦行者が死んで火葬されたときに一緒に消滅するでしょう。善行為の結果を輪廻する来世にまで持ち越すことはできないことになります。現代的に考えて、功徳はデジタルに数値やポイントとしてだけ「ある」としても、架空の存在ではないので、どこかに「ある」のです。ネットワークで繋がっていたとしても、すべてのコンピュータが破壊されれば、そこに保管されていた記録も破壊され消滅してしまいます。

そういう、善行為の結果（功徳）や悪行為の結果（悪徳）がもし物質だというならば、インドでは当たり前の観念「輪廻」を越えて来世に持ち越すことはできないことになってしまうは

ずです。しかしその点は考慮されていないように思えます。

あるいは、バラモン・ヒンドゥ教は仏教と違って永遠不滅の「我」を想定しますので、功徳も悪徳もそこに保管され、それが不滅のまま来世まで持ち越すのかもしれません。しかしそうすると、「我」がどこにあるのか、未だに発見されていないのです。そのへんは何とも言えませんが、それにしても、本来清らかなはずの「我」が功徳や悪徳によってより清まったり汚れたりするのもおかしな話です。本当は、功徳とは何かということを、釈尊のように厳密に調べていないだけではないかと思います。

また、原先生は述べていませんが、功徳が物質ならば、それを他者に廻向すれば、その分だけ自分の功徳の貯蓄が減ることになると考えているであろうと想定できます。もう少し時代が下りますと、ヒンドゥ教では仏教のような心に刻まれる業としての功徳ではなく、こういう「物質的な功徳」という観念が逆により明確になってきます。

シヴァ教獣主派の例（紀元七世紀）

シヴァ教といいますか、ヒンドゥ教の一派で、シヴァ神を祭る宗派の中にさらに派が分かれていて、獣主派という派があります。格好いい名前がついていますが、何のことはありません。これは獣の真似をするだけです。バラモンというか修行者なのに犬の真似をしたり、猿の真似をしたりします。その代わりに、人間の言葉を一生使わない、人間のように安楽に生活せずに

犬や猿のように森の中や地面でだけ寝起きする、食べたり排泄したりも犬や猿のようにするという「苦行」をします。

生活の仕方は人間よりも動物のほうが厳しくて苦しいのは当たり前ですから、苦行をして徳を積む聖者ということで、こういう犬や猿の真似をしても「苦行者」として人気が出たりするそうです。その苦行者（犬行者とか猿行者）の近くには、必ず在家の信者さんがいて通訳やお世話をします。例えば犬の真似をする苦行者の傍に在家の世話人がいて、信者さんが例えば「私の子どもが、今度、結婚するんですけど、うまくいくでしょうか、いかないでしょうか」などと尋ねると、それを世話人が苦行者に「ワンワンワン」などと通訳して説明するわけです。そうすると、苦行者が「ワンワンワン」と答え、人間の世話人がそれをまた人間語に通訳して「うまくいくから結婚してもいいんじゃないか」などと伝えるわけです。「その程度のいい加減な宗教」と言っては申し訳ないですが、その行者は苦行をして徳が高い（徳が貯まっている）から、その人にお布施したら自分もより大きな徳が積めるのではないかということでやっているようです。犬語や猿語が話せる在家の通訳の方がよっぽどすごい能力だと思うのですけど。こういう変な苦行者も今はほとんどありませんが、たまに猿の真似をしているような人や、一生を無言で過ごす行をしている人はいます。

そういう修行をしているのはいいのですが、少しせこいところがあります。原先生によると、苦行者は獣のふりをして、わざと軽蔑されて自分は耐えるという修行をして徳を積む。軽蔑し

た人は苦行者をそうとは知らずに軽蔑して悪徳を積むわけですから、苦行者だけ徳を積んで在家者は悪徳が増えるのです。相対的に、苦行者がより一層徳を高めるのです。しかもそれが、功徳と悪徳を交換しているかのように考えられていたようです。

修行の第二段階に至ると、彼［獣主派行者］は寺院を後にし、獣主派の標識を捨て己が身分・学殖を隠蔽して市中に出る。彼は一般人の食べ残しを生命の糧となしつつ、「扉」と称せられる行法に服さねばならない。その行法は「高鼾の狸寝入り」「痙攣」「跛行」「媚態」「支離滅裂な言辞」「奇行」の六つより成り、それらはバースカラやヤームナ等が「隠匿行」と呼んでいるものに相当する。その期するところは一般人をして獣主派行者を痴人・狂人と誤認せしめ、彼らに獣主派行者に対する軽蔑・嫌悪を喚起せしむるに在った。（中略）第二段階にある獣主派行者はこの激しい一般人の侮辱に耐え、それを以て苦行となし、そこに積善の道を見出した。即ち、誤ってバラモンを非難する一般人は「バラモン軽視」の罪によって己が善根を失い、不当な非難に耐える行者は彼らより善根を得、代わりに己が罪障を彼らに与える。善根や悪徳の移行は仏教の廻向を想起させるが、それらは善業や罪障を実体的に考えていた古代インド人に特殊な思惟方法に根差している。[3]

原先生がおっしゃるとおり、やはりインドでは一般的に功徳や悪徳は物質的に考えられてい

たようです。善業(功徳)や罪障(悪徳)の遣り取りというか、軽蔑させて功徳を相手から騙し取ったり、うっかり軽蔑してしまって功徳を取られたりし得るものだと思われているのです。

しかし功徳が物質のように遣り取りできるとしたら、まずいことが起こります。いつも必ず「自業自得」とは言い切れなくなるのです。まあ、「自業自得」の法則が絶対だと言っているのは釈尊の仏教だけで、バラモン・ヒンドゥ教は神々の意思によって多少は変わると見ていますから、インドの一般的な見方としては問題ないのかもしれません。

問題は、バラモン・ヒンドゥ教の影響を受けて起こってきた大乗仏教です。後で考察しますが、大乗仏教の功徳廻向を見て、学者が「自業自得」の法則を一部破っていると解釈するほどです。大乗といえども仏教なのに、そんなことでいいのでしょうか。

しかしそれよりも、本当に、功徳や悪徳は物質なのでしょうか。

ヒンドゥ教のシュラッダ（祖霊祭）

このようなところから見ますと、釈尊より後の時代も含めますが、インドの宗教、バラモン・ヒンドゥ教では、徳を積むと自分のものになるという自業自得だけの可能性も考えてはいるようですが、それよりも、なんとなく功徳や悪徳がお互いに移行すると考えているような面もあるようです。

自業自得ならば仏教の見解とも一致しますが、業というか功徳が他者と物質のように遣り取

りできるなら、自分の悪業を他者に押し付けたり、他者の善業を自分が奪い取ったりして自分がつくった悪業から逃れることができるなど、結局、自業自得の法則が破綻することまで前提にしているのではないかとも思えます。

しかし実際には、バラモン・ヒンドゥ教の文献に功徳のことや特に功徳廻向のことが説かれることは非常に少なく、現代の研究者がその内容というかしくみまで精査できるほどの情報量がありません。しかも、当のバラモンたちがしっかりと調べて功徳を物質だと理解して、「では、物質だから物々交換みたいにして功徳の遣り取り（廻向というより移行）もできるぞ。そうすると善悪業の自業自得の法則も少しは崩れるかもね」などと大胆に判断したのでもなさそうなのです。あまり深く考えずに、隣接する宗教・仏教の功徳廻向の事例なども横目に見ながら、「功徳ってこんなものじゃないの？」などと物質であるかのように軽く考えていただけのように思えます。

では、仏教では功徳と廻向はどういうものだと見ているのでしょうか。

二　釈尊（原始仏典）に功徳と廻向

では、原始仏典、パーリ語による仏典のなかの一番古いところでは功徳と廻向をどのように

見ていたのでしょうか。

まず、功徳とは何か、その正体が分かっていなければ、それを物質のように「移行する」にせよしないにせよ、「廻向する」というはたらきがどういうことかも分かりようがありません。

ところが、その功徳とは何かについて、釈尊は「功徳は物質ではなく心の要素である」とか「物質ではないので自他の間で遣り取りできないが『廻向』はできる。そのしくみは」などと簡単に説明していません。功徳はどのような善行為によっても生じる善い結果の別称ですから、仏教が見る功徳とその廻向について知りたければ、善悪の行為とその結果たる善悪業のしくみそのものについて知るしかないのです。

心の因果と物質の因果は別物

世の中には二種類の因果があると仏教では見ています。一つは物質の因果です。物質は地（質量）水（引き付ける力）火（変化させる力）風（引き離す力）の四元素であると仏教では捉えています。元素とは言っても、厳密に見ればエネルギーですね。現代の原子物理学の知見と不思議に一致します。それら四元素がさまざまな割合で組み合わさって物質世界のすべてを構成していると見ます。

物質は物質だけの因果法則で成り立っています。例えば、空気中の水蒸気が集まって（水元素が強くなり）重くなり（地元素が強くなり）、重さに耐えられなくなって雨として地上に落ち

ます。土に染み込んだり川から海に流れたり、いろいろな他の要素が水に溶け込んだりして分解されたりまた水になったりして（火元素のはたらきで）絶えず別のものに変わっていき、また蒸発して（風元素が強くなり）空に昇ります。そういう物質のサイクルを、因果によって変化生滅し続けている物質の因果と捉えています。物質の世界にも偶然とか突然変異というものはなくて、必ず、原因があって結果があると見るのです。それは心というか意思がはたらく「行為と結果」ではないので業の法則とは呼ばないのですが、物質の因果法則なのです。

もう一つは、心の因果です。心が永遠不滅の魂とか我などというものではなく、一瞬ごとに生滅変化を繰り返す因果の連続であることを、釈尊は発見しました。心も、死ぬや否やまた生まれ、生まれるや否やすぐに死に、死ぬや否やまた生まれ、と、生滅の因果を繰り返しています。心の生滅の連続は、物質の因果法則と別に、心の因果法則で動いています。

釈尊は心の正体を突き止めて悟りを開きました。釈尊によると、心は一瞬ごとというか一刹那ごとに絶え間なく隙間なく（無間に）生滅を繰り返す「認識する」というはたらきの連続です。生滅を繰り返しながら何かを「認識する」ことだけが「心」なのです。心の生滅の繰り返しが心の因果の連続です。

認識するはたらきだけの心には、いつもさまざまな感情（心の要素「心所【しんじょ】」と言います）が混ざって、喜怒哀楽や貪瞋痴、智慧や慈悲などのどれかが含まれています。心を生まれさせる「意思」も、心の要素「心所」の一つで、これはいつも心に含まれています。認識

するはたらきだけの純粋な心だけが生じることはないとさえ、仏教では言います。心は混じりっ気なしの純水のようには存在できない。心だけでは生滅を繰り返すことはできないのです。心には必ず何らかの心所（感情）が混ざって、最低限、生きたい、生まれたいという「意思」が混ざって、生まれます。しかも他の「心所」もいろいろ混ざるので、心の様相はコロコロ変化するのです。

心の生滅も因果法則です。これは物質の因果と違って、心が自分ではたらいて生滅を繰り返す心の因果ですから、感情が含まれます。善い心をつくって一瞬で死んだら、直後に生まれた心は直前の心の影響を受けているので、善い心になる可能性が非常に高いです（他の心的要素や物質や他者の影響などさまざまな「縁」も一瞬の心の生滅に同時に関わるので百％の一対一対応にはなりませんが）。

行為には必ず結果（業）が生じる

物質は引力や重力や圧力や温度などに随って変化生滅の因果を繰り返します。分かりやすいです。心も一つの確固たる魂・我ではなく、絶え間なく生滅を繰り返している因果の連続なのですが、心は何が原因で生まれ、死に、また生まれているのでしょうか。

先ほど、心の要素「心所」の一つである意思がはたらくと言いましたが、きれい過ぎる言い方です。心を生まれさせている原因は、ありていに言えば、「死にたくない。生きていたい」と

いう意思なのです。釈尊が世界で初めて発見したのですが、諸行無常・生まれたもの（行）はすべて（諸）無常です。すぐに死にます。しかし心は死にたくないので、死ぬときに「生きたい。まだ死にたくない」と心の断末魔を叫びます。その力（意思）でまた生まれるのです。しかし心はすぐに死にます。死ぬときにまた慌てて「生きたい。まだ死にたくない」と心（意思）が叫びます。それでまた生まれます。そうやってきりがないほど生まれて、しかしすぐに死ぬ、しかしすぐに生まれる連続が続いています。

日常生活では気づきにくいかもしれません。しかし身体も一緒に死ぬ臨終のときには、はっきり分かります。心がものすごく泣き叫んで「死にたくない。まだ生きていたい」と悲鳴を上げるのです。それでも身体が死んだら、心は今度は別の身体を必死につくります。それが生まれ変わり・輪廻です。本当は一瞬ごとに生滅を繰り返して輪廻し続けているのですが、本人にありありと分かるのは、身体も一緒に死んでしまったときです。

心も生滅を繰り返す因果の連続なのですが、物質の生滅のように「崩れました」とか「流れました」というふうにあっさりしていません。必死です。「壊れたくない」とか「なくしたくない」などという感情が強くはたらきます。それが業になります。心が生まれるたびに、身体を使って、言葉を使って、あるいは心だけで、善いことや悪いことをしたり言ったり思ったりします。心はすぐに死ぬのですが、直後にまた生まれる心にその影響力が入ります。業です。直前までの心の業を引き継いで、新たに心が生まれるのです。

過去のたくさんの業がさまざまにはたらきかけて結果を出して消滅するのですが、同時に、新たにさまざまな業をつくっていますので、業はおよそなくなりません。むしろ増えていきます。しかし古い業はどんどん結果を出して消えていき、新たな業をどんどんつくるので、業の質を変えることはできます。心が徐々に善い方向に変われば、その結果たる業も徐々に善いものに変わっていくのです。人間に生まれた業は死ぬまで一生続き、途中で鳥や天人に変わるなどということがないように、身体の特質などの業は一生涯変わりにくいものが多いですが、心はコロコロ変わります。業もけっこう変えられます。業は宿命論ではありません。

自分の行為の結果（業）を自分で受けながら、その業にも影響されつつ他の縁にも反応しつつ新たに行為を続けて業をつくり続けているので、業は結果が出れば消えるのですが、新たにつくる方が多くて、きりがありません。業の総量はきりがありませんが、その質を変えることはできます。身・語・意の行為（因）が善か悪かで果（業）も善か悪か決まります。善業の場合は、功徳とも言います。悪業は悪徳とも言います。業は必ず自分（というか「自分」の心の連続）に刻まれるので、「自分」の行為に無責任になるのは危険なことです。身体で、言葉で、心で善行為をして功徳（善業）を貯めた方が業の質が善いものが増えるのです。

固定した我のような自分ではありませんが、業は「無間」の心の生滅の中で連続しますから、決して他者の心にも、ましてや物質にも移行できません。移行できるだけの隙間が、「無間」の心の連続にはお互いにないのです。物質と心は、じつは混ざり合わないので、これは考えなく

て良いでしょう。もし混ざり合ったら大変ですよ。いつも使っている椅子が、あるとき、「重いなあ。もう少しダイエットしてよ」なんて、言ったり思ったりしていたら気味が悪いですね。心の要素である功徳を廻向することは、物質をあげることとは別のしくみなのです。

縁は受けたり受けなかったり

ちなみに、他人のために善行為をしてそれが相手に受け入れてもらえなくても、自分の行為の結果（業）は自分に帰るので損はしません。相手が得をしそこなっただけです。

逆も真理です。先に紹介したヒンドゥ教の獣主派の考えは仏教から見ると間違いです。獣主派の修行者から悪行為や悪徳や悪意を向けられて（「廻向」されて）、それを縁にしてこちらが怒ったり相手を軽蔑したりすると、こちらの悪業になります。しかし、相手からの誘いをただ「受け取らない」でいれば、こちらが悪業をつくらないので、それですみます。功徳も悪徳も心なので、物質のように移譲や交換や押し付けをすることはできないのです。相手の善悪の行為やその廻向に影響を受けて（縁となって）こちらの心が善悪の反応をしたときだけ、反応による業がこちらの心に生じるのです。こちらの因果は相手の因果とは関係なく、お互いに縁になるか、ならないかだけなのです。

釈尊自身の例があります。仲間のバラモンが仏教に出家したのに怒って、あるバラモンが釈尊を訪ねて誹謗・非難を浴びせました。それに対して、釈尊はご馳走の喩えを説きました。

「バラモンよ、あなたのところに誰か親族知友が訪ねてきたら、最高のご馳走を用意するでしょう。しかしその親族知友がそのご馳走を受け取らなかったら、そのご馳走は誰のものですか？」

「受け取らなかったら、私のものです」。

「バラモンよ、それと同じように、あなたは誹謗しない私を誹謗し、非難しない私を非難しました。私はあなたの誹謗も非難も受け取りません。バラモンよ、その誹謗と非難はあなたのものです。

バラモンよ、誹謗する者を誹謗し返し、非難する者を非難し返すのは、主人と客が共に食事をして共に［悪徳を］分け合うことと同じです。私はあなたと共に食事をしません。［悪徳を］分け合いません。バラモンよ、この誹謗と非難はあなたのものです」。（『相応部』「バラモン相応」）

釈尊は、バラモンの誹謗・非難を縁として自分も一緒に怒るのではなく、その誹謗・非難を受け取らなかったのです。影響を受けなかったのです。誹謗・非難を返さず、心に怒りを生じさせることもなかった釈尊には誹謗・非難という語業、あるいは怒りという意業から生じるはずの悪徳が生じません。バラモンの悪業は、バラモン自身にはしっかり生じます。他者の善行

為や悪行為に影響を受ける人は、それを縁として自分で喜びや怒りなどの善悪の業をつくり、それを受け取っているのです。他者が押し付けても、業や心はもらえません。示された他者の行為に対して自分が意思で心を変えて、あるいは感情的に同調して共鳴して、自分も相手と同様の業をつくるのです。心が変わらず、同調も共鳴もしないなら、同様の業は生まれません。

後で検討しますが、廻向した功徳を相手が受け取るかどうかは、釈尊が別のバラモン青年ジャーヌッソーニさんに教えた内容にも含まれています。自分が善行為をして生じた功徳を他者に「廻向する」とか「あげる」というのは、他者にただお知らせしているだけです。その影響を受け取るかどうかは、相手次第なのです。そして、功徳を「受け取る」とはどういうことでしょうか。これも後で検討する『餓鬼事』で明らかにできると思います。

心と物質は相互に影響し合う

釈尊は心（行為と結果＝業）の因果と、物質が変化生滅する因果を別々に見ています。もちろん、物質と心はまったく別ものであると、物質と心の二元論で世界を分類しています。しかしややこしいことに、心と物質は、心と心と同様に、お互いに影響（縁）を与え合います。

物質が心に影響を与えることは体験的によく分かります。湿度が高くて蒸し暑いと、仕事をする気力が減ります。暑くも寒くもなくそよ風が吹いているなら、心地よく、遊ぶにも仕事するにも元気いっぱいになります。身体という物質も、軽やかに感じられます。こういうふうに、

普通は外部の自然環境や物質世界が心に影響を与えることが分かりやすいでしょう。外部が大きい世界で、私はその中のほんのちっぽけな一人なのですから。

ところが、心も物質に影響を与えるのです。ダイエットなどで必死になって、私たちは心の意思で身体という物質を変えています。もっと分かりやすい常識的なところを言いますと、建物や道路を造ったり橋を架けたり川の流れを変えたりという物質を使って物質に影響を与えるその物質を動かす行為は、心がやっているのです。農作業や林業もそうです。

そして心は、先にも見たように、他の生命（心）にも影響を与えることができます。もちろん、自分も物質からだけでなく他の生命からの影響も受けます。しかも、他の生命（心）も、それぞれ身体という物質を持っているのです。身体という物質は、心のはたらいていない純粋な物質と違って、心に強く結び付いています。心は身体に簡単に影響され、心も、身体に絶えず影響を与えています。そのため心と身体は一体のように見え、他の宗教や哲学では身心一元論なども主張されます。しかし仏教では因果と影響（縁）を明確に区別して、物質は物質、心は心という物心二元論を崩しません。おまけに自分の心と他者の心が混ざることもあり得ないとします。自分の心の流れがずっと続いていくのですが、その流れが他者の心の流れと混ざったり交代したりしないと、経験上、言っています。因果の連続は同時でも異時でもなく「無間」なので、混ざったり交代したりする隙間がないのです。一つの心の生滅の流れに、他の心や物質は、割り込む余地がありません。そうではなく、他所で同様に生滅を繰り返す他者の心が、自分の

心と相互に影響を与えたり受けたりするだけなのです。因果の連続ではなく、そのときどきの縁になっているのです。影響とは、「縁」という「外部の」要素なのです。

そういう仏教の見方から導き出して、釈尊は細かいところまで明言していませんが、善行為の結果・業は特別に功徳と呼ぶこともあり、悪行為の結果・業は特別に悪徳と呼ぶこともあり、功徳も悪徳も、心がつくった結果＝業だと分かります。業にせよ功徳にせよ、心という因による心の結果、心の要素なのです。物質ではありません。

しかし、功徳が物質ではないなら、それを他者にあげることができるのでしょうか。心をあげたりもらったりするとは、どういうことでしょうか。釈尊の数少ない説明を聞いてみましょう。

三「功徳を廻向する」とは[4]

『シガーラ教誡経（六方礼経）』

善行為によって生じる功徳は心所・心の特質で、物質ではありません。ですから本来、功徳を物質のようにあげるとか、もらうということは想定しにくいのではないかと思います。

それでも仏教では「功徳を廻向する」と平気で言います。では、廻向とはどのようなことでしょ

うか。パーリ経典（原始仏教経典）の中にチラチラと出てくるものをいくつか探し出しました。

例えば、『シガーラ教誡経（六方礼経）』では、子どもが両親に五つのお勤めをしなければいけないのですが、一つ目は、小さい頃から親孝行をして、親に感謝する。二つ目は、親に育ててもらったので、今度は自分がしっかり仕事に就いて親を支える。さらに、仕事に就くだけではなく、家の名前を継いで家長として村や社会への責任を果たす。それから、家の財産も相続して守る。最後の五番目に、そのうち親が亡くなりますから、親が亡くなったらお布施をする。という子供が親に対してするべき五つのお勤めが示されています。

経典では、親に対する子どものお勤めの最後に、「亡き親族のためにdakkhiṇam anuppadassāmi（私はお布施をします）」と言っています。普通の「dassāmi（あげる）」ではなく、「anu（近づいて）upa（上の方向に向かって）dassāmi」です。何となく、宗教者などに直接お布施するのが目的ではない感じがします。亡くなった親のために何かしたいけれども、直接には何もできることはないから、代替案として誰か他者（宗教者）に近づいて、亡き親がいる方向かどうか分かりませんがとにかく上の方向に向かってお布施するという感じです。

しかし説明はこれだけで終わっています。ただ、何となく、親が亡くなった後も親に対するお勤めが終わりになるのではなくて、まだ何かできることはある、それをやろうとしていることはわかります。

増支部経典「ジャーヌッソーニ品」

『増支部経典』のなかに「ジャーヌッソーニ品」という、バラモンの青年ジャーヌッソーニさんに対するお説教があります。

バラモンのジャーヌッソーニさんは、自分たちが普段からおこなっているシュラッダ（祖霊祭）の効果があるのかないのかわからないのです。先ほどお話しした『ヤジュル・ヴェーダ』の中に、儀式の仕方なんかがみんな詰まっています。お供え物は犠牲動物や何やかやをどれだけ用意して、儀式執行の日取りはどうやって決めて、バラモンへのお布施というか報酬はどれだけで、施主は長男でなければいけないけれども親族は何名以上集めて云々という規則が、いろいろ書いてあるのです。

しかし、そういうふうにバラモンたちは、自分たちの考えであれこれ式次第を決めて、決めた通りに儀式をおこなうのですが、「そうやってお供え物をしたり、儀式が終わったらそれを燃やして先祖界にいるはずの先祖に送ったりしているつもりになっているけど、そういう布施を先祖は本当に受け取るのだろうか？」とジャーヌッソーニさんは自信がなくなったのです。答えがわからないので、釈尊に問うたのです。

釈尊に尋ねたということは、かなり重要なことです。儀式の作法をあれこれ決めて、それを門外不出のバラモンたちだけのものにしているのですが、肝心のそういう儀式に効果があるのかないのかという根本的なことについて、バラモンたちのなかでも誰も知っている人がいな

かったということなのです。そういう、バラモンたちにとってはとても恥ずかしいことはバラモンたちの記録には出てきません。仏教の記録というか経典には、淡々と事実だけが記録されています。

ジャーヌッソーニさんに尋ねられて、釈尊はまず「五道輪廻」の話を始めました。そこから説明しないと、バラモンへの布施に効果があるのかどうか、つまりその布施の功徳が亡き先祖にきちんと届くのかどうか、正確には理解できないからです。

ジャーヌッソーニさんに五道輪廻を説明したのは、輪廻を五道に分類していたのが仏教だけだったということもあるでしょう。バラモンたちも、世界の他のどの地域のどの宗教でも、輪廻のことをある程度説いてはいましたが、その内容たるや、漠然とこの世と先祖界の二種類くらいしか想定していませんでした。そういうバラモンに、まず、輪廻の境涯は五種類だと教えなければならなかったのです。

釈尊が輪廻のしくみを解明する前から、インドでは生命が生死を繰り返して輪廻するのではないかと、けっこう当たり前に信じられていたようです。しかし輪廻のしくみや生命が輪廻する世界のことなど厳密なことは釈尊以前には知られていなかったようです。たいていは、日本でも見られるようなこの世と先祖界を往ったり来たりするだけの輪廻観でした。業報輪廻という厳しい因果に基づく厳密な輪廻ではなく、素朴な、死んでも消えたわけじゃない気がするという程度の輪廻観です。バラモンたちも、釈尊が五道輪廻を解き明かすまでは、その程度の輪

廻観しか持っていなかったのです。ですから、それからまず説明しないといけなかったのです。

輪廻の境涯の最初というか最底辺は地獄です。「人間であるときに、こういう悪いことをして、来世で地獄に行っている人がいます。地獄の生命には、布施は助けになりません」で終わりです。地獄は、悪業がひど過ぎて、助けを求める暇さえもなく常に苦しみに苛まれている世界で、人間界から功徳廻向をして助けてあげたくても、他者からの救いを受け取る余地もない世界です。

地獄と同様の説明で、畜生道にも「布施は助けになりません」。こちらは次の人間界と同じで、功徳廻向などしなくても、直接助けてあげればよいでしょうという意味のようです。犬や猫や人間同士は、心や言葉で「私の功徳をあげるよ」などと廻向してもいいのですが、直接、お世話し合えるでしょうということなのです。自分が食べものを余分につくったら、「おすそわけです」と持っていったり、病気なら看病してあげるとか、直接、お互いにお世話できるのだから功徳廻向とかややこしいことを考えなくても、まず目の前の生命を直接助けてあげなさいということです。

「こういう善いことをして生まれ変わっている人間と天人にも、布施は助けになりません」と釈尊は続けます。人間には直接に助けを与えましょうということです。天人には、自分で満ち足りているので人間からの布施（功徳廻向）による助けが必要ないのです。

残る一つ、悪いことをして餓鬼道に落ちている生命には、布施は助けになります、と、やっと釈尊がお墨付きを与えます。

ジャーヌッソーニさんは、理屈はまだ全くわからないのですが、「餓鬼道にだけは布施は助けになる」と言ってもらって、とりあえず安心したようです。「少なくともあるレベルの生命には布施が届くのだ。効果があるならやる意義はあるのだ」ということです。

じつはここで、バラモンたちの先祖供養の儀式からすでに枠が外れて、広大な世界に足を踏み入れています。バラモンたちは施主の先祖供養をとにかく大事にしたいだけなのですが、釈尊は「あなた方が布施をして功徳を誰かにあげたいのであれば、餓鬼には受け取ってもらえるかもしれないからやる価値はあります」と言うのです。ここにカラクリがありまして、パーリ語では先祖というか死者一般も、餓鬼道の餓鬼も同じく「ペータpeta」と言います。だから、地獄、畜生、人間、天以外の先祖petaというか餓鬼petaには功徳廻向が役に立つと言われると、なんだか納得しやすかったのです。

しかし餓鬼道にいる先祖にしか布施が助けにならないのでは、せっかくのシュラッダ（祖霊祭）が不十分というか、その効果に当たり外れがあることになってしまいます。ジャーヌッソーニさんもそれに気づいて、「しかし、もし先祖がその餓鬼道にいなかったらどうなるのでしょうか？」と尋ねます。

釈尊は、「特定の親族以外にも、餓鬼道には必ず誰か、無限の輪廻のなかの自分の親族がいます。彼らが布施の功徳を受け取るので心配要りません」と答えます。あなた方が亡き親族のためにいろいろ儀式をしてお布施をして功徳廻向をしているのはわかります。しかしその特定の

親族が餓鬼道にいなかったら、せっかくのお布施（功徳廻向）がその人には届きません。その代わりにと言ってはなんですが、親族の範囲を広げて、あなたの無限の輪廻を重ねるなかでの親族を全員「親族」に含めてください。そうすると誰かが必ず餓鬼道にいて苦しんでいるので、お布施や功徳廻向はその人たちのためになります。ということなのです。

私がこの人間界に生まれる前には、犬か猫かムカデだったかもしれません。天人だったかもしれません。その前には地獄に落ちていたかもしれません。餓鬼だったかもしれません。人間だったかもしれません。そういう輪廻を繰り返す中で、生まれた先々で家族がいて親族がいます。無限の輪廻です。過去世のどれだけの輪廻のなかをたどってもたどり切れないほどの輪廻ですから、「その輪廻のなかでは、すべての生命の中で私の家族・親族でなかった人は誰一人もいませんよ」と釈尊が別のところで言っています。

つまり、「あなた方が特定の直近の先祖のためになるようにと供養や儀式をやっていますが、本来、先祖とは、無限の輪廻の中ではこれほど広い世界のことですよ」と言っているのです。バラモン青年の気持ちを損なわないようにしながら、結局は特定の先祖よりは無限の輪廻の中の先祖、つまり「一切衆生のために廻向したらよいです。誰か受け取ってくれる生命が必ずいますから」と教えているのです。

しかし、シュラッダ（祖霊祭）の効果はあるのかどうか、まだ疑問に思っていたジャーヌッソーニさんが、「でも、私の輪廻のなかの先祖が、誰も餓鬼道にいなかったらせっかくの布施や功徳

廻向も無駄になりませんか？」としつこく聞きます。

釈尊は丁寧に教えます。「いやいや、そんなことはあり得ませんよ。すべての生命がいろいろな悪業や善業を繰り返して悪いところに行ったり、善いところに行ったりしているなかで、餓鬼界だけ空っぽということはあり得ません。先祖といっても現世だけの先祖ではないのですから、あなたの先祖の中でも誰かは必ず餓鬼界にいるから布施は無駄になりませんよ。しかも、万が一、餓鬼道が空っぽだったとしても、先祖のためにお布施という善いことをしたのだから、その功徳はあなたのものです。決して無駄にはなりませんよ」と、そこまで教えてあげるのです。

例えば、道端のお地蔵さんに千円札をお布施しようとして置いた途端に風で飛んでいってしまっても、お布施にならなかったと心配する必要はないのです。功徳は千円札ではなく、お布施する行為に生じるのだから、あなたはあなたの善行為の功徳を受け取っています、ということなのです。しかも、その功徳を他者にもあげるというかあげようという意思表示をしたのですから、その分の功徳も加わるのです。これが廻向という善行為です。廻向すると、相手に届くかどうか以前に、自分が功徳を他者に廻向するその功徳が、自分にだけは必ず生じるのです。自業自得はいつでも必ずあります。

そういうわけで、先祖のために祖霊祭をやってお布施する功徳は自分にもばっちりもたらされるし、先祖の誰かは餓鬼道で受け取ってくれるので、功徳廻向はまったく無駄にはなりません。心配は要りません。と、そこまで言ってジャーヌッソーニさんもやっと納得しました。

ただ、功徳廻向のしくみは、ここでも明らかにされていません。

小部経典『餓鬼事』に説かれる功徳廻向「布施を指定する」

パーリ経典「小部」の中の『餓鬼事』（紀元前六世紀～紀元前三世紀）において、功徳は心に生まれた善業だから、あげると言っても実際にはあげられなくて、そのはたらきはこういう法則なのです、ということが説明されます。

『餓鬼事』というお経があります。五一のお話の中で釈尊も三つか四つぐらい幽霊（餓鬼）に関して話しています。他の長老方あるいは信者さんたちが、幽霊に出会っていろいろ対話をしたお話を集めたものです。幽霊に関するお経ですが、日本の怪談みたいな怖がらせるお話ではなく、実際、全然怖くないです。

幽霊が唐突に縁ある人間の前に現れるのですが、何を言うかといいますと、たいがいは「私は前世でちょっと嫉妬をしてしまって、ちょっと欲が強すぎて、今、こういう餓鬼に生まれて苦しんでいますから、あなた方は、嫉妬や欲にあまり夢中にならないで、家族仲よく暮らしなさい」などと教えてくれるわけです。幽霊のほうが人間に教えてくれるのです。ですから私たちも幽霊が出てきてもびっくりして逃げずに、取りあえず、「何か言いたいことがあるんじゃないの？」と話を聞いてみたらいいかもしれません。

そのなかで、「私に功徳を廻向して助けてください」と頼む幽霊もいます。「私は、今、餓鬼

界で困っていて、その理由もわかっている。前世でこういう悪いことをしたから、今こういうふうに苦しんでいるのです。ところで、あなた、私のためにちょっとお布施などの善いことをして、その功徳を私に指定（廻向）してください。そうしたら私は楽になるんだけど……」などと頼んでくるのです。そういう功徳廻向のお話が一四話、註釈書のなかには、さらにもう五つほどあります。

話を聞いた人間の縁者も、実際に「はいはい、わかりました」とお坊さんなどにお布施をして、「この功徳をあなたにあげますよ」と目の前に立っている幽霊に言うと、幽霊の目の前に必要なものが現れてそれを享受できたり、それどころかいきなり天人に生まれ変わったり、とにかく苦しみが消えて楽になるのです。その様子がまた人間の縁者にありありと見えるのです。

本当ですよ。嘘だと思ったら、藤本晃・訳『死者たちの物語「餓鬼事経」和訳と解説』という本が出ていますので、買って読んでみてください。図書館で借りてもよろしいですけれども、読んでみてください。

『盂蘭盆経』の元ネタになった「舎利弗の母」というお話もあります。『盂蘭盆経』は中国でつくられたニセモノのお経（偽経）だと言われています。『盂蘭盆経』自体は実際にニセモノなのですが、そのお話の元は、この『餓鬼事』の中にあるのです。『餓鬼事』では、目連尊者ではなく舎利弗尊者の、しかも現世での母ではなく四回前にたまたまお互いに人間だったときにはその餓鬼が母で舎利弗尊者がその息子という関係でした。この世界での直接の母ではないので

すが、無数の輪廻の中であるとき母だった人が、その縁を頼って現世の舎利弗尊者に「助けてください」とすがるのです。舎利弗尊者も気楽に、「では、明日、托鉢に行きますから、その托鉢でもらった食物を分け合うときに、私がみんなに分けてあげて、その功徳をあなたにあげます」と約束します。それで一旦、四回前のときのお母さんも安心していなくなります。翌日、本当に功徳を廻向してあげて簡単に助けてあげて、めでたしめでたし。終わりです。

中国でつくった『盂蘭盆経』は大げさな話になってしまいます。比丘サンガの三ヶ月間の雨安居明けの大布施会のときにお布施しなければ、そのくらいの大パワーでないとお母さんを救えないなどという大げさな話になっています。

それで、功徳廻向して餓鬼を救うのですから、「六道輪廻」あるいは「五道輪廻」は当然前提されています。阿修羅を餓鬼（幽霊）に含めたり、天人に含めたり、阿修羅として別に出したりして、餓鬼や天人に含めたときには「五道輪廻」で、別にしたら「六道輪廻」です。釈尊は「五道輪廻」と言っていたのですが、後に、阿修羅が別に立てられて「六道輪廻」になっています。いずれにしても、『餓鬼事』では「五（六）道輪廻」が事実として前提されています。

その餓鬼という生命は、前世の苦しみの結果を受けて、その苦しみの世界にいる間に悪業をなんとか消費します。悪業に苦しむだけの一生ですから、餓鬼でいる間は本来、自分では何も善いことをすることはできません。

しかも、人間界から飲食物というか物質を直接与えられても飲んだり食べたりして飢渇を抑

えることができません。「喉が渇いて困っているんです」と言う幽霊が出てきたので、「では、あなたに水を飲ませてあげます」と、川の水を汲んで飲ませようとする話もありますが、映画『パイレーツ・オブ・カリビアン』のように、飲もうとしたらダバダバと喉からこぼれていってしまうのです。口から入れたのに、水が喉を通ってお腹に入っていかない。水を飲むことができないのです。

その理屈は書いてないのですが、幽霊（餓鬼）がそこにいるように見えても、人間界の人間とは構成物質が違いますから、見える人はいるかもしれませんが、物質を直接あげても、人間界の物質を幽霊（餓鬼）が飲んだり食べたりすることはできないのです。ですから、お墓や仏壇にお供えものをしても、ご先祖が夜中にこっそり食べに来るということはないわけです。食べものや飲みものは直接には届きません。心というか、功徳をあげるということがポイントです。

『餓鬼事』全編の中、釈尊自身の偈は第一、四、五話だけ

功徳を廻向して餓鬼を救うしくみがどういうふうになっているかと言いますと、釈尊自身が説いている「偈【げ】」は、第一話、第四話、第五話の三つだけなのですが、その三つにだけなんとか功徳廻向のしくみが分かるだけの説明があります。

第一話で、「施物（お布施される物）、施主（お布施する人）、受け手（お布施を受ける相手）

がそろって布施行がおこなわれるとき、それは先亡者（亡くなった人）のためにもなり、施主のためにもなる」と説かれています。ですから、「おそらく誰か亡くなった人のためにお布施をしたのでしょうけれども、もちろんそれは亡くなった人のためになります」と、釈尊はまず認めています。先亡者へのお布施（功徳廻向）は役に立つのです。

その上、「誰かのためにお布施をしたのだから、自分の手元には功徳は残らない」ではなくて、「当然、自分のためにもなっています」と明言しています。品物のように、お米を一升用意して、「これをあなたにあげます」と言ってあげたら、自分の手元にお米は残りませんが、相手にあげた分だけ自分の分は減るのですが、功徳廻向というか「功徳をあげる」ということは、そういう物質の移行・移譲ではないということはわかります。誰かのために何かをやってあげたけれども、それは相手のためにもなっていて、しかも自分のためにもなるのです。行為と結果（業）ですから、自分の持ち物はなくなっても、行為とその結果はなくならないのです。

第四話でも似たようなことが説かれています。ここでは功徳廻向は、餓鬼だけでなく先に亡くなった人なら誰のためにでも、その上、神々のためにもやっていいようです。神々（天人たち）は、廻向されても功徳はもう要らないけれども、一応、喜んではくれるようです。そして、「先亡者や神々のために比丘サンガを供養したら」、彼らのためにもなりますが、当然、「施主も果報・功徳を受けます」と明言されています。しかし、そのしくみはまだわかりません。

功徳廻向のしくみは、第五話で、やっとチラッと出てきます。亡き親族のためにお布施をす

ると、亡き親族は「我々のためにやってくれたのだ」と、それを随喜するのです。随喜とは、誰かの何かの善行為に自分も同調して、「随って喜ぶ」ことです。「近づいて（anu）喜んでいる（modanti）」のです。他者の善行為を「これは、私たちのためにやってくれたんだね」と正当に評価するというか、単純に嬉しくて喜んでいるようです。ただ、「偈」にはそこまでしか書いてありません。

私は、功徳廻向で自分が積んだ徳を他者に「あげる」としても、最低限、自業自得の法則が崩れることになってはおかしいではないかという疑問を持っていました。この三つの偈で分かるように、廻向する人の自業自得は明確に保たれています。自分の分はしっかりあります。なにしろ自分が善いことをして、誰よりも自分が満足して喜んでいるのですから、その気持ちを人に「あげて」も、自分の気持ちがその途端に消えるわけはありません。気持ちは心ですから、誰かに「あげて」も消えないのです。

しかしその一方で、相手に「あげた」ら、相手にも功徳があるのだから、物質のように半分ずつとか、あるいはコピーされた「複写功徳」を「もらう」のかどうかということは、ちょっと分かりませんでした。

『餓鬼事』第五話の偈で読み取れるのは、功徳を廻向された相手は、他人の功徳をもらっているのではなくて、どうやら他人の善行為を素直に「喜ぶ」という自分の心の行為をしているようです。しかも他者の善行為を喜ぶのは、それも善行為に決まっています。独力では善行為を

することができないはずの非力な餓鬼も、他者が自分のために布施などの善行為をして、しかも、その功徳を自分に廻向してくれたら、その気持ちを素直に喜ぶくらいのことはできるようです。

『餓鬼事』から読める功徳廻向の法則

註釈書も含めて、功徳廻向のしくみをなんとか解明しましょう。重複しますが、まず、「衣服や食事などの物質が移譲されるのではない」、これは第一〇話に出てきます。

先ほど言いたかったことがここに書いてあります。「手から手にあなたが私に与えるものは私の助けになりません」。水を飲ませてもらっても喉からダバダバとこぼれてしまい、渇きが癒えることはないわけです。

では、心の属性である功徳（業）が移譲されて、自業自得の法則を破るのかというと、そうでもなさそうです。なにしろ、「心をあげる」ことは実際にはできません。しかし、施主も餓鬼も共に功徳廻向の功徳を得ているので、施主のほうは自業自得だとしても、餓鬼のほうは「他業自得」になっているのではないかという心配も生まれそうです。「他業自得」も、自業自得の法則を破ることになってしまいます。

しかし、功徳を廻向された餓鬼が、それをきっかけとして何か善行為をしていたら、「他業自得」ではなく、餓鬼は餓鬼で自分の善行為の功徳を受けたと言えるでしょう。それが『餓鬼事』

の第五話で、「他者の善行為や廻向を餓鬼たちが随喜する」とまで示してあったのです。

第五話の註釈書のところでは、後のお坊様のより詳しい説明が入っています。「功徳廻向しても自業自得の法則を破ることにはなりません」と、まず、後のお坊様がはっきりと註釈しています。そして、「自業自得の法則を破るのではなく、餓鬼のために布施された施物は、餓鬼が善行為をするための『縁』になるのです」と説明されています。

これが業としてはものすごくややこしいわけです。仏教では一方で、自業自得、自分がやったことの結果は自分に返ってきて、他者に移ることはないと断固として言うのですが、ものごとは因と果だけの単純な一対一対応ではないのです。自分が何かやるときには、必ず他者にも影響を与えたり、自分自身も他者や他の物事からの影響をいつも受けながら何かをやっているのです。周りの人や物事とお互いに縁になったり、縁を受けたりして、その上で自業自得をやっているのです。だから因果関係も分かりにくくなってものすごくややこしいのです。

私が山口県のお寺で一人でこんな偉そうなことを言っていても、仏さまは聞いてくださるかもしれませんが、あんな田舎では誰も聞いてはくれません。豊橋まで出てきて、愛知大学でこのような講義をするとなると、来てくださる方がいて、いろいろな縁が広がっていくわけです。私も縁を与えるだけでなく、たくさん受け取っています。皆さんは皆さんでご自分の判断でここにおいでになって、良い話か悪い話か知らないけれどもとにかく聞いて、聞いたことでまたご自分で考えて、自分の心をどんどん変えていくわけです。因と果の間に必ず同時に影響を与

えるたくさんの「縁」が、本当にわかりにくいですが、作用し合っています。一方で自業自得と言いながら、その自業が必ず周りからの影響を受けたものであり、自分が何かやったときには必ず周りにも影響を与えているのです。

それで、ふだんからよく言いますけど、「あの人にやってもらった」とか「やってあげた」ということになるわけです。誰かの「代理」で何かをしたとしても、それさえも自分の行為なのです。代わってもらってその行為をしなかった人も、「任せた」という行為をしているのです。それぞれの縁を受けたり与えたりしながら、それぞれに自業自得があります。

善いことなら「あの人のおかげで」とか、悪いことなら「あいつのせいで」などとなってしまったりする、あの「おかげ」とか「せい」も、自分が影響（縁）を受け取ったり与えたりしているのです。

功徳廻向と随喜の話でいえば、「あの人にこういうことをやってあげて、私も嬉しい」ということが善行為です。その功徳を誰かに「これはあなたのためですよ」と手向けると、あるいは「一切衆生にあげます」などと宣言すると、功徳廻向です。廻向は、何か善行為をして、それを他者のためにまたやってあげているのです。他者のために自分がやるのですが、やはり、やっている当の自分が、何か善い方向に変わっているのです。善いことをしたら、自分は自分で功徳を受けているのです。

その上で、功徳を廻向してもらった人も喜ぶかもしれません。それは、誰か他人の業・功徳

をもらったのではなく、「あの人の功徳廻向のおかげで自分はこうなれた」と、誰かの何かの行為が縁になって、自分が自分を善い方向に変えたと言えるのではないでしょうか。

そのへんはお経にもあまりはっきりとは出てこないところです。「業のことを本気で考え始めると頭が狂ってしまうから、あまり根を詰めて考えないほうがいいよ。ほどほどにやったほうがいいよ」と釈尊自身が注意していますので、業の問題はある程度で抑えなければいけないかもしれませんが、法則としては、「縁」と「因」で分けて考えるとわかりやすいのではないかと思います。誰かの功徳廻向のおかげで自分が助かったということは、誰かの功徳廻向が自分が助かる縁になったということです。助かるのは自分自身ですから、助けたのも自分自身の心とか行為なのです。そういう法則が何となく見えてきます。

註釈も合わせて、功徳廻向のしくみが明らかに

一応、強引にまとめます。功徳廻向のしくみが釈尊のお経でなんとか明らかになりました。施主は、もともとの布施行という善行為と、それをわざわざ誰か他者に、特に一切衆生に功徳廻向するのですから、功徳廻向という善行為と両方の功徳が生じるので、二倍の功徳があるのではないかと私は考えています。

廻向を受け取って喜んだ餓鬼は、自分のために廻向（指定）された他者の布施行を一緒に喜ぶ随喜という自業の功徳を得ているのです。お互いに縁となりながら、それぞれが自業自得で

道を切り開いているのではないかということまでは読めるのではないかと、これは一五年も前の博士論文で発表したのです。

次の問題は、『餓鬼事』に書いてある、釈尊が解明した功徳廻向が、釈尊の仏教以外の世界にどの程度伝わっているのかということが読み取れないことです。じつは、大乗仏教にさえ、まともに伝わっていないかもしれないのです。

四　釈尊以降の仏教に見られる功徳と廻向

碑文[5]（紀元前三世紀～）

釈尊以降の仏教に見られる功徳と廻向がきちんと釈尊の廻向のしくみを理解していればいいのですが、どうでしょうか。

紀元前三世紀のアショーカ王の法勅碑文以降、インド文化圏でメッセージを石や煉瓦に彫り込むことが流行りました。アショーカ王以前には、ほとんどありませんでした。あったとしても、「これは私の領土です」と記録する程度のものだったであろうと思います。

ところが、アショーカ王の後に、例えば、「お寺を建てました。この功徳は一切衆生にあげます」などという短文がたくさん彫られるようになりました。今も精舎の跡を発掘すると、礎石や石

柱などにいろいろ寄進文などが発見されます。インドだけでも三千例近くあります。スリランカでも、アショーカ王の時代の伝道からすぐ、紀元前三世紀ぐらいのものから寄進文がいくつも出てきています。

石に彫られた当時のまま残っているため、口伝で伝わったお経や中国の紙に書き写したもの、インドや東南アジアの貝葉（ばいよう）に書き写したものよりよほど正確ではないかという学者もいますが、文面が短過ぎて功徳廻向のしくみはよくわからないのです。そもそも「廻向」や「指定」などという専門用語はあまり書いてないのです。この功徳は誰々「のために」とか、この事業は一切衆生「のために」というふうには書いてありますので、誰か、または一切衆生に功徳廻向したのだろうということは何とか読み取ることができます。

また、アメリカのショペン（Gregory Schopen）先生が碑文を大乗仏教のものと「小乗」仏教のものにどうにかして分けようとしますが、それはやめたほうがいいです。大乗仏教と「小乗」仏教といいますか部派仏教というものは、少なくとも日常の信者さんの生活にとってはあまり関係なかったのではないかと思います。

お坊さんにとっては、戒律をしっかり守らなければならないのが部派仏教といいますか「小乗」仏教のほうで、大乗仏教は結構ルーズでしたが、信者さんにとっては、「誰かお坊さんがいたら、お布施して功徳を積んでしまえばいいや」というようなもので、少々だらしなくても、その地域の文化で認められていたら、結構、どのようなタイプのお坊さんも生き残ることがで

きていたような気はします。

現に日本でも、一五〇年前の明治維新のときに、「さあ、お坊さんも妻をめとって在家になりなさい」という政府の指令が出ると、お坊さんたちもそれに乗ってしまい、出家の正式なお坊さんはほとんどいなくなってしまったのですが、それでも仏教は何とかまだ生き残っています。なぜかと言えば、いろいろな信者さんが、お坊さんのレベルは下がっても、お寺やお坊さんにお布施し続けて、現在でも支えているからです。お坊さんのほうはどうであれ、信者さんにとっては、功徳を積むことにあまり区別はなかっただろうという気はします。

実際に、碑文を読んでみましても大乗・小乗の区別はつきません。しかも、ショペン先生が言うのは、「大乗は一切衆生のために廻向して、小乗は自分の先祖のために廻向する」などという、古いステレオタイプの小乗・大乗の分け方です。それでは役に立たなかろうと思います。実際に出てきた碑文から読み取れるところでは、最初期の紀元前三世紀のものにすでに「一切衆生の平安のために」という文言があります。大乗なんかまだ影も形もない時代です。功徳廻向の文言とか廻向する気持ちは、大乗とか小乗という思想の違いよりは、もっと単純な願いの表れだと思います。人間が何か善いことをして、しかもそれを誰かのために廻向するときには、直近の先祖も大事ですが、大風呂敷を広げて「一切衆生のために」とまで言ったほうがいいという感覚が何となく身体でわかっていたような気がします。

もう一つポイントがあります。大乗で「廻向」といえば、よく「pariṇāmanā（振り向ける）」

という言い方をします。大乗仏教に出てくる廻向はたいてい「pariṇāmanā」です。「自分の功徳を何かの目的のために捻じ曲げる」という言い方になっているのです。「大乗仏教には廻向があります。小乗にはありません」と言う人さえいますが、「小乗」というか釈尊の廻向は、「誰それのために」とか、「これは誰それのためです」という言い方で、特定の専門用語を使っていないので、わかりにくいだけなのです。

肝心の大乗の廻向といわれている「pariṇāmanā」は、碑文でも、この後に見る大乗仏典でも、紀元後三世紀以降にやっと出てきます。大乗の「廻向」のほうが圧倒的に後なのです。

パーリ語の原始仏教経典に見られるように釈尊が最初から功徳廻向を教えていたのですから、紀元前三世紀頃の碑文の最初期のものからもう廻向の文言が見られるのは当たり前でしょう。実際に出てきています。一方、大乗が世に現れたのは紀元前後ですから、大乗よりはるか前に、功徳廻向の観念はインド中に伝わっていたと言えるでしょう。誰が伝えたかと言えば、バラモンたちでは頼りないのです。「小乗」というかパーリ語で説かれている経典に見られるとおり、釈尊や弟子の比丘たちが教えたということになります。

しかも、紀元前三世紀はスリランカに、そして、東南アジアにも「小乗」仏教が届き始めるころです。アジア世界に、仏教と共に功徳廻向の観念も広がっていったはずです。

つまり、西暦紀元前後に大乗が出現する前から、誰でも素朴に他者のために善行為をしていたのですから、功徳廻向は大乗仏教の専売特許ではありません。釈尊が、正確にしくみを示し

つつ功徳廻向の仕方を教えているので、功徳廻向は仏教の専売特許とは言えるかもしれません。功徳廻向が世に知られた最初の頃は、仏教にしか功徳廻向の観念はなかったかもしれません。ただし、バラモンたちも先祖供養祭（シュラッダ）をやっていましたから、そのしくみは分からなかったとしても、功徳廻向する気持ちはインドの宗教には古来共通のものだったかもしれません。

「この功徳は俺のものだ。誰にもやらんぞ」などと、けち臭いことは言いません。どのような宗教でも、どのような社会でも、やはり他者を助けたいという気持ちはあります。その具体的な表明が、さまざまな形の法要やお布施、そしてそれらの功徳を廻向する功徳廻向なのです。

大乗経典（紀元一世紀～）

「大乗経典」に功徳廻向を探してみようと思ったら、紀元一世紀頃にはプロトタイプが出ていた最初期の「大乗経典」である「般若経」や「法華経」や「無量寿経」には、功徳廻向という発想はありませんでした。つまり大乗仏教には最初から功徳廻向の観念があったとは言えないのです。

一九七四年に櫻部建（さくらべはじめ）先生が「大乗仏教の廻向には二つの種類がある」とおっしゃっています。[6] 一つは、①自分が徳を積んで、それが自分の悟りのためになるように、自分にパスするのです。

バスケットボールでよくありますが、他者にパスするのではなく、ちょっと宙空に投げ上げておいて、相手をかわして、自分がもう一度ボールを受けるような、自分のためにという廻向が大乗にはあるようです。

しかしこれは、釈尊の原始仏教でいえば「誓願」です。「廻向」と言わないほうがいいです。「私が徳を積みました。この徳によって、私に悟りへの道が切り開けますように」と自分で誓願するわけです。本来は「廻向」とは言いません。しかも、自分の善行為の功徳が自分にもたらされるのは、自業自得なので、当たり前のことです。ただ、この「廻向」の原語が、大乗仏教で後に発展した功徳廻向を意味するpariṇāmanā（捻じ曲げ）のようで、そのためこれも「廻向」とされているのだと思います。

実際、「般若経典」には功徳の方向を捻じ曲げて（後のpariṇāmanāに繋がる?）、方向といっても自分から他者にではなく、あくまで自分から自分になのですが、世俗的な善行為だけれども、その功徳を出世間の悟りの方向に持ち上げて自分の悟りの糧にしますという考え方がチラチラと見えます。もちろん廻向というよりは誓願です。ですからこのタイプの「廻向」は、大乗特有の思想ではないでしょうか。

もう一つの、②「自分の功徳を他者の利益に振り向けるという普通の功徳廻向は、大乗にもある」と、桜部先生は言います。それはあってもよいし、あるのが当然なのですが、困ったことに、「それは自業自得の法則を超えている」と櫻部先生は言うのです。

しかし、自業自得の法則を越えたという証拠が何かあって、それに基づいておっしゃっているのでしょうか。原始仏教経典に見られた功徳廻向が、廻向の受け手が功徳を随喜することでその自業の功徳を受けているのだから自業自得の法則はやはり壊れていなかったことを確認しました。桜部先生の論文には自業自得の法則を越えたという証拠は提示されていませんが、「大乗経典」には、そういう「自業自得の法則を越えた」とか、逆に受け手の自業自得であることを示す随喜のことまで説かれているでしょうか。

しかし、随喜どころか最初期の「無量寿経」「法華経」「般若経」などには、他者に自分の功徳をあげますという、原始経典やバラモン教などにあった一般的な功徳廻向の観念そのものが見られません。

「無量寿経」には一例だけ、「法華経」にはない

どのように見られないかといいますと、「無量寿経」のサンスクリット原典のなかに「廻向(pariṇāmanā)」という言葉が一ヶ所だけ出てきますが、これは自分の功徳が自分の極楽往生のためになるようにと「廻向する」というか「誓願」しているのです。桜部先生の分類の①の方で、功徳を他者にあげている廻向ではないのです。

『法華経』には、「pariṇāmanā」という言葉自体がありません。逆に、『餓鬼事』と同じく、善行為をするときにそれを他者に「指定して(uddiśya)」という言葉が九カ所あります。しかし、

そのすべては「如来のために（如来を指定して）」という文言で、その善行為を自分の悟りの糧にしようという「誓願」になっています。これも桜部先生の分類でいえば①で、他者への「功徳廻向」とは言えません。

その一方で、鳩摩羅什・訳『妙法蓮華経』「化城喩品」第七の最後に一ヶ所だけ、自分が善行為をしてその功徳を他者というか一切衆生に廻向している文言が見られます。漢訳『妙法蓮華経』では、梵天たちが自分たちの楼閣をブッダに寄進して、「願わくば、この功徳を以て、普く一切［衆生］に及ぼし、我ら（梵天たち）と衆生と、みな共に仏道を成ぜん」となっています。これは明らかに、桜部先生の分類の②、自分の善行為による功徳を他者・一切衆生に廻向する功徳廻向です。[7] ただしサンスクリット原典にはこの偈の前半部がなく、功徳廻向しているのかどうか明確ではありません。インドで「法華経」を保持していた人々には功徳廻向の観念はあまり育っていなかったけれども、『妙法蓮華経』が漢訳された時代（紀元四〇六年）の中国では功徳廻向がよく知られていたので、漢訳者・鳩摩羅什が書き加えたということかもしれません。

「般若経」

「般若経」ですが私は調べていませんが、森山清徹先生によると、「随喜（anumodanā）」がよく使われているということです。[8] 他者が何か善行為をして功徳を積む。すると、「ああ、あの行為は素晴らしいですね」と自分が喜んで評価してあげて、自分は随喜の功徳を積みました、と

いうことです。

「般若経」では、功徳廻向は主に他者から自分が功徳を「もらう」という意味で「随喜(anumodanā)」を使っています。廻向ではなく随喜なので、桜部先生の分類の①とも②とも言えません。そしてもっと大事なことですが、この「随喜」で他者の功徳を「もらう」とまでは読み取れないと思いますが、万が一、実際にもらっているつもりなら、「般若経」では自業自得の法則が崩れて「他業自得」を説いているということになってしまいます。実際には「随喜する」とだけ言っていて、功徳を「もらう」かのようにも見えますが、そこまで詳しく説かれていないだけなのです。

現在の東南アジアやスリランカでは、「随喜」もたくさんやります。「私の功徳をあなたにあげます」という「功徳廻向」と「あなたの功徳を私にください／私がもらいます」という「功徳随喜」は、受け手と与え手が本来いつもセットになっていますので、「もらう」ということはせこい話ではないのです。自分だけ功徳廻向して他者にあげるばかりで、「他者からもらうのは要りません」などと遠慮する必要はないのです。

「あなたは善いことをしましたね。あなたの功徳を私にもちょうだい。私も随喜します」と言って功徳をもらうことが、当たり前なのです。「あげる」とか「もらう」とか言っていますが、自分と他者の垣根が低くて、「誰がやっても善いことは善いこと。善いことを見ると私も嬉しい。喜んだ」という単純明快な話なのです。

釈尊のお経によりますと、「あなたが立派なことをしたのは、私も本当に嬉しい」と自分が他者の善行為を正しく評価して喜ぶ「随喜」という自分の善行為で、自分が功徳を得ているのです。ですから、少なくともスリランカでは、「あなたの功徳をください」と平気で言っています。ミャンマーのことは伊東先生にお聞きしたほうが早いと思いますが、そういう言い方はスリランカにはあります。

ただ、「般若経」の最初の頃には、功徳をもらうことが何となく、もう少しせこい意味で使われていたように思えます。しかも「般若経」も「無量寿経」や「法華経」と同様に漢訳、サンスクリット原典ともに何度も改訂増補されていますが、その最後期の、サンスクリットでは紀元十一世紀頃、漢訳では十世紀頃のものでもまったく同様に、功徳廻向の観念が見当たらないのです。

仏教学界では功徳廻向は大乗独自の思想という

とにかく、最初期の大乗経典のなかに、「他者に自分の功徳をあげます」「一切衆生に自分の功徳をあげます」という思考を読み取ることができないのです。

ところが、中期、紀元四世紀から五世紀頃の「華厳経」には、「私の功徳を他者にあげます」という思想も入ってきています。ただ、私はサンスクリット原典は確認しておりません。漢訳の「華厳経」では、ということです。「華厳経」も、漢訳は何度か改訂増補されています。原典

もそうであっただろうと思います。また、漢訳者が原典を翻訳するだけでなくいろいろ内容を追加して盛り込むことはよく見られる現象です。先の五世紀初頭の漢訳『妙法蓮華経』もそうでした。また、五－六世紀のことですが、中国の曇鸞の論文にも釈尊のとおりの普通の功徳廻向が出てきます。

ということは、功徳廻向が大乗仏教でよく知られるようになったのは、大乗経典、特にインドでのサンスクリット原典に説かれていたのではなく、紀元四－五世紀以降の中国で漢訳者や大乗論師が論書を著したおかげということになりそうです。その漢訳者や大乗論師たちの功徳廻向のアイデアは、大乗経典にはないのですから、原始仏教経典から取り入れたのだと考えられます。

仏教学界では今まで功徳廻向は大乗独自の思想であり、しかも自業自得の法則を破っているのではないかと考えられていましたが、実際には、大乗の初期のもの、一番古いものには他者への功徳廻向の事例が見られず、自分の功徳を自分のために振り向けるものだけでした。

そして、中期以降の大乗経典や大乗論師の書物、特に漢訳や中国人の著作には、他者への功徳廻向の観念も見られるのですから、功徳廻向は大乗独自の思想とはとても言えません。原始仏教経典からもともとあったのに、最初期の大乗経典にはそれが反映されず、だいぶ後代になってやっと大乗にも、というより主に中国で取り入れられたのではないかと私は考えています。

ただ、バラモン・ヒンドゥ教のように功徳が物質的に移譲されるのではないかという例は、

今のところ大乗経典にも読み取れておりません。サンスクリット原典には例自体がおよそなく、漢訳や論師の著作では不明瞭なままです。

ついでに言いますと、碑文からは、短文ですが、功徳廻向は当たり前に読み取れます。しかも大乗よりも古くからありますから、一般世間では功徳廻向は気軽にやっていたと思われます。ただし、碑文に見られるのは廻向する文言だけで、廻向された誰かが「受け取ったよ」とか「随喜したよ」などと碑文に書き加えるわけがありませんので、功徳廻向のしくみが理解されていたかどうかまでは、文章が短い碑文から読み取ることはできません。ただ、碑文は経典のように理屈を説くのではなく、廻向する人が自分のこととして真剣に布施をして廻向している仏道実践の記録なので、他者にも功徳が「届く」という理解はあったと思います。

五　仏教史から仏教思想へ

善行為は三種類（拡張して一〇種類）

釈尊があまり明確に語っていない功徳と廻向のしくみを何とか解明してみたいと思って、仏教の教えを整理して分析したアビダルマからヒントを探してみます。

善行為というものを、アビダルマでは三種類に分けています。一つは「布施」。誰かに何かを

してあげるという善行為があります。二つ目は「持戒」。これは戒律を守るだけではなく、敬うべき人を敬い、誰かのお世話をして支えるという自分を律するような善行為も含みます。それから、悟りに直接結び付く「修行」です。説法を聞いたり、自分も教えを説いたり、自分が修行をして悟りを開くこと。

他者のためになることをしてあげることと、自分の心を律して他者を支え、敬うべき人をしっかりと敬うこと、そして、悟りに向かって修行するという三種類が、善行為となっています。

三種類の善行為を細分すると十種類にできます。「持戒」のところには、恭敬と作務が入っています。「修行」は、聞法・説法・見正業とに分けられます。「見正業」とは、正しい業を見たということで、悟りに向かうことです。面白いことに、「布施」については、功徳廻向と功徳随喜も「布施」に関わる善行為だと、アビダルマでは分類しています。

しかし実際に他者に功徳を与えるのではないのですから、それで布施の仲間と言えるのでしょうか。

功徳廻向はどのような布施行かといいますと、紀元前三世紀のアビダルマ論書『論事(kathāvatthu)』という書物には、『餓鬼事』の第五話と第一〇話を例に挙げて、物が実際に餓鬼に移譲されることもなく、功徳が移譲されることもないと明言しています。「ある者が何か仕事をして、別の者がその結果を受ける［自業他得／他業自得］ということはありません」と。「そうではなく、餓鬼は自分の随喜による果報を自分で享受しているのだから、自業自得です」と、

アビダルマをまとめたお坊様がはっきり書いています。

『餓鬼事』第五話の註釈にありましたが、功徳廻向が、あるいは用意された施物とか布施行が、功徳を廻向された人が自分で他者のそういう善行為を素直に喜ぶ「随喜」という自分の善行為をおこなうための縁になっているのです。因果法則はいつも自業自得ですが、お互いにいつも縁になって業をつくっていますから、他者の善行為が縁になって自分も心を清めたと、他者の善行為を喜んだことで自分が徳を積んだのだと言えるでしょう。

つまり、功徳廻向も功徳随喜も、善行為の中で布施に分類されているのですが、実際にはなにもあげていないし、もらってもいないのです。それではどうして布施の仲間なのでしょうか。「気持ちをあげる」とか、「共感する」とか、「心を手向けている」のです。その感覚は分かるのですが、どうにかして構造を説明できないでしょうか。

釈尊は功徳廻向のしくみを明確に説かなかった

なぜ、釈尊がそれ以上はっきり説いていないのかといいますと、心のはたらきは説明してもわからないからではないかと想像しています。

仏教では物心二元論、物は物で、心は心で、まるきり別物と見ています。しかし同時に、心が物質に働きかけて物質を変化させ、物質の影響によって心もどんどん変わるので、すごくややこしいわけです。生命の身体は、物質と心が区別しにくい「複合体」に見えます。物質と心

は別々のはずなのに、身体は、心と物質が「混ざっている」ようにさえ見えるのです。

物質・身体・心の三者で考えると、身体は物質にも影響されますが、心にも影響されますし、心は身体をつくります。身体の機能、感覚器官や運動機能が心に影響を与えることもあります。心は認識というはたらきだけで、認識とは、眼耳鼻舌身意、眼と耳と鼻と味わう、身体に触れる触覚、それと心の六種類だけなのですが、その認識・感覚と、それに影響されて起こる感情や思考はもちろん、言葉や身体でおこなう行為も、まず心がはたらいてからやっているので、心のはたらきです。今、私が話して音を出しているのは、心が何か考えて、身体を使って意思表示をしているわけです。言葉であっても、あれこれ身体を動かしているのも、すべて心が何か指令を出していますので、心が物質を動かしているわけです。釈尊が経典の随所で説いていたそのような法則が、一応、アビダルマで分類されています。

行為や言葉には物質的要素と心の要素がありますので、物質的要素は物質の因果法則で動いていますが、それを起こさせた心の行為の結果というものは心の因果法則で動いています。それぞれ、心は心で、物質は物質で、無間（間を置かずにいつも隙間なく）に、刹那生滅（生まれては消える）を繰り返しています。

しかし、私がこう説明していることも、経典やアビダルマの説を受け売りしているだけで、実際に分かっているかというと心許ありません。悟りを開いたら、自分の心が一瞬ごとに心をつくって、何か善いことをしたときはその心が消滅するときにその善い結果・功徳を次の心と

一緒に生まれさせていることが、はっきりわかるでしょう。

誰かの善行為をたまたま見ていた人が「あなた、とても善いことをしましたね」と喜んだら、廻向しなくても、その人も自分の心の喜びによって心を善い方向に変えたのです。ですから、心を見ることができたら、他者の善行為を喜んだ心が直後に消滅するとき、次に生まれる心にそのときの功徳が一緒に生じているとわかるはずです。しかし実際には、悟らない限りは、厳密にはわからないことです。

もう一つ、わかりにくい問題があります。「自分と他者の心は混ざらない」ということが、どうにも証明しにくいのです。

映画の『転校生』でしたでしょうか、男の子と女の子が神社の階段から落ちて、心が入れ替わるという映画、あれは男女が入れ替わる『とりかへばや』という大昔の物語の真似だと思います。自分と他者の心（というか身体？）が入れ替わることも、大昔からあり得るかもしれないと想像されていたのですが、これは、「あり得ない」と説明しにくいのです。

心は心で、身体は身体で、物質は物質で、それぞれ独立して隙間なく（無間に）変化生滅し続けているのですが、それぞれが相互に影響し合う（縁となる）のですから、どうなっているのか分かりにくくなるのです。あの男の子の身体の連続と女の子の身体の連続はそれぞれ別々なのですが、近づいたり手を繋いだりすると、相互の影響（縁）が強まります。心さえ、あの男の子の心の連続と女の子の心の連続と、二つが近づいたり会話したりすると、相互に影響し

合うのですから、こんがらがるような気がするのです。因果の連続と縁を厳密に見分けるのは至難の業です。ですから、釈尊は、説明できないことについて言うのは面倒くさいということで言わなかったのかなとも思います。

心と物質はそれぞれ別だというだけでもわかりにくいのですが、その上、ややこしいことに、心は物質を通してのみ物質や他者の心を認識します。心が他者の心を、直接認識することはできないのです。必ず物質的要素が入ってきて、心が物質を揺らして、それを媒介（縁）にして認識するのです。自分の心の連続だけは自分の心だけで認識できます。今の心が一瞬ですぐに死んでしまいますから、そのショックで間違いなく次の心が生まれてしまうのです。ほぼ同じ記憶（業）を持ったまま。

しかし、他者の心も、物質も、心は眼耳鼻舌身意の特に最初の物質的な五官を通して認識しているのです。「世界」を認識しているのも、眼耳鼻舌身の五官です。意（心）は、入ってきた情報に基づいて考えたり感情をつくったりしています。意（心）は直接「世界」と接しているのではありません。五官から入る認識を意（心）があらためて認識しているだけです。

誰かの「心」を理解しているつもりでも、その誰かが発した声を聞き、その内容を判断し、挙動を観察して、相手の「心」を理解したつもりになっているだけです。すべて五官の情報に基づいてこちらの心が推測しているに過ぎません。

「無色界梵天」という生命がいるらしいです。あまりにも深い禅定に入って、身体さえ忘れ

てしまい、身体とか物質はまったく必要ないということで、「心だけで生きている生命がいる」と仏教では言います。それが無色界梵天です。その心だけで生きている生命は、いるのですが、その生命をこちらが見つけることはできないのです。身体とか物質がないので、探しようがないのです。もちろん、向こうからもこちらというか外界のことは分かりません。眼耳鼻舌身がないので、見えません。聞こえません。匂いも味も分からず、触れることもできないのです。分かるはずがありません。

何かいるはずなのに、心だけではアクセスできないのです。その無色界梵天自身は、自分の心だけで生きていて、自分の心だけで生滅を連続して、心だけで元気に生きているのです。その梵天も他の生命がいるかどうかもわからない、他の生命もその梵天にアクセスできないそうです。理由は全く仏典に書いてないのですが、スリランカ上座仏教の長老で日本で永く活動されているスマナサーラ長老によると、「身体がない＝五官がないのだから、向こうからもこちらからも認識できるわけないでしょう」ということだそうです。

功徳廻向も、何か善行為をするときはまず心が善に揺れて、その心で言葉や身体を善に揺らして、そのありありと分かる言葉や身体や物質を媒介にして、「さあ、これらの施物によるお布施の功徳を廻向します」などと示しているのです。功徳を廻向されたら、それに気付いた人だけが、それを縁にして随喜などの行為をするのです。

功徳廻向も功徳随喜も、お布施と違って物質はもう関係ないのに、物質や言葉を使った心の

善行為をさらに、他者に認識させたり（廻向）認識して喜んだり（随喜）しているのです。心を実際にあげたりもらったりしていないのですが、心の遣り取りをしているといってよいでしょう。

ですから、われわれが何か善いことをしても、黙っていたら、やはり周りにはわからないかもしれません。朝起きると、いつもうちの家の前まできれいにしてある。同じアパートの誰かがやっているのだろうけれどもわからない。ある朝、いつもよりかなり早く起きてみたら、隣のおばあちゃんが掃除をしてくれていた。「あなたがやっていたんですか。いつもありがとうございます」。「いやいや、私は暇だから、年寄りで朝早く目が覚めるから、用もないからやっているだけですよ」。「そうでしたか。健康にもいいし、人のためにもなるし、一石二鳥ですね」という話に広がるでしょう。

気付いて、初めて誰かが善いことをしたこともわかるのです。それを素直に喜んだら、気付いた人の心も変わっています。何か善いことをした人も、その善いことをしている毎日のお掃除の功徳は、きちんと自分のためになっているのでしょうけれども、やはり、自分の心をさらにぐっと他者（ひと）に向けて、「この自分が頑張った善行為の功徳をみんなにあげますよ」と、もう一度、宣言するぐらい言葉に出すか、心を定めて、心を定めたときには身体も新たにぐっと変わっていると思いますが、それをやったら功徳廻向という新たな善行為になるのです。

餓鬼に功徳が届くとか、餓鬼が「助けてくれ」と言いに来るということは、餓鬼は人間とは

違いますが、まだ身体があるのです。テレビの心霊番組などでは、「気持ちが悪いね。変な匂いがするね」とか、「音がしたね」とか、「温度が下がったようだ」とか感じられるほど、幽霊もそれなりの物質は持っているらしいです。ですから、たまには見ることもできると。そういう物質というか身体のようなものがあるから、「功徳を廻向して助けてほしい」などと、なんとなく意思疎通ができる場合もあるのです。

そういう餓鬼が「助けてくれ」と言うときにも、私が何か善いことをして、「これはあなたのためですよ」と、そこまでやらないと何かが変わらないみたいです。功徳廻向は心でおこなう行為です。功徳随喜も心だけでやっているはずですが、それがお互いにわかるのは、やはり「あげます」「廻向します」「あなたに指定します」などと言葉などで意思表示するからなのです。意思表示までしてはじめて「廻向」したと言えます。

人間同士なら、功徳廻向しなくても、他人の善行為をたまたま見ていたり話に聞いただけでも分かります。廻向されなくても他人の功徳（善行為）を随喜することはできます。しかし動物は、善行為を見ても聞いてもたぶん意味が分からないでしょう。わざわざあなたのためだよと言って、やっと分かるかどうかでしょう。餓鬼もそのくらい心が弱いのでしょう。自分のために功徳廻向されないと、随喜できないのだと思います。

人間同士の場合は、それぞれ身体の物質は持っているし、心はそれぞれ動いている。お互いに助けたり、助けてもらったりしているということです。そう考えますと、功徳廻向は世間で

言う「助け合い」そのものですから、当たり前の善行為だと思います。仏教的に「業」で説明しようとすると大変難しくなってしまいますが、「助け合い」ならいつでもどこでも気楽に助けたり助けられたりしているのです。

功徳廻向は「助け合い」という程度の、あまりにも当たり前の行為だから、仏典にもあまりしくみの説明がないのかもしれません。しかも、ちょっと正確に説明しようとしたら、「自業自得の法則を超えているのではないか」などと要らぬ考えにまで話が進んでしまったりします。それほど大層なものではなく、社会でお互いに助けている、支えているということが功徳廻向だろうと思います。

おわりに―功徳と廻向は仏教から世界に広がった

功徳と廻向の観念が仏教から世界へどのぐらい広がったかといいますと、私にすれば仏教からと言いたいのですが、世間的にはおこがましいかもしれません。「助け合い」なんて、どの文化でも当たり前に理解されることです。それなしには社会が成り立ちません。

私は仏教のおかげで、功徳廻向がアジア中に広がったのではないかという気はしないでもないのですが、逆に考えてみますと、結局、どこの世界でも「善いことをして徳を積もう」とか「徳

を分け合おう」などという観念がありますから、偉そうに「仏教が発見したんだよ」と言わなくても、宗教者でなくとも誰にでも何となく、「助けてあげる。助けてもらう」の思考がもともと全世界にあったのかもしれません。このあたりは私の範囲を超えますので、来週以降の講座に参加して学んでもらうしかありません。

現実に、われわれはどうやってうまく生きているかといいますと、要らぬことを考えずに素直にやりましょうということです。「私の功徳だから人にはあげないよ」と言っても無理なのです。自分が何か善いことをして、それを隠していたくても、誰かが見ていたらバレてしまいます。「あなた、すごいですね」と評価してもらったら、「しまった。私の功徳が減るかもしれない」なんて慌てなくてもいいのです。「まあ、頑張りましたよ。あなたにもこの功徳をあげますよ」ぐらい言ったほうがいいです。相手がその功徳を喜ぶかどうかは別にして、自分の善行為を他者（ひと）に手向ける自分のその心が、さらに善行為になっているのです。

他者（ひと）が何か善いことをしたときには、「あなたの功徳を私にちょうだい」とまで言ったほうがいいです。お互いにやってあげたり、やってもらったりですから、自分だけあげて他者からはもらいませんというのは、逆の意味で頑固でケチな思考です。自分の調子が悪いときには堂々と助けてもらうように、他者（ひと）が何か善いことをしたら、その喜びを分けてもらえばよいのです。そういうふうにして社会を成り立たせていけばよいのではないかと思います。

最後は、甚だまとまらなくなりましたが、これで終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

註

1 阪本（後藤）純子 1996「iṣṭā-pūrtā祭式と布施の効力」『今西順吉教授還暦記念・インド思想と仏教文化』春秋社。

2 原實 1979『古典インドの苦行』春秋社、二二四～二五頁。

3 原實 1988「ヨーガと苦行」『岩波講座東洋思想7』岩波書店、一一四頁。

4 藤本晃 2004「パーリ四ニカーヤに説かれる先祖・施餓鬼供養」『日本仏教学会年報』第六九号、一七～四七頁をご参照ください。

5 Schopen, Gregory1985. “Two Problems in the History of Indian Buddhism,” *Studien zur Indologie und Iranistik*, 10. pp.9-47. 静谷正雄1978『小乗仏教史の研究』百華苑。より高価で専門的ですが、塚本啓祥1996, 1998『インド仏教碑銘の研究Ⅰ・Ⅱ』平楽寺書店もあります。

6 桜部建 1974「功徳を廻施するという考え方」『仏教学セミナー』二〇号、九三～一〇〇頁。

7 坂本幸男／岩本裕・訳注 1964.2002『法華経』中巻（岩波文庫）、五二～五三頁。ただしサンスクリット原典では、漢訳前半の「願わくば、この功徳を以て、普く一切［衆生］に及ぼし」という功徳廻向の文言が見られません。後半の「我ら（梵天たち）と衆生と、みな共に仏道を成ぜん」だけでは、善行為の功徳を悟りに振り向ける①とも受け取れます。西暦紀元前後にサンスクリット原典が出た頃にはまだ功徳廻向は大乗経典「法華経」では導入されておらず、鳩摩羅什による漢訳『妙法蓮華経』（A.D.406訳）の頃には大乗仏教でも、あるいは中国で、よく知られるようになったということか

もしれません。

ただし、サンスクリット原典と言っても紀元後五世紀頃から一一世紀頃までの三〇ほどの写本があり、しかもそのいずれも漢訳と比べると原典同士お互いに差が非常に少ないので、サンスクリット原典あるいはインドでは「法華経」には功徳廻向の観念がないまま一一世紀まで時が経ち、そのまま一二世紀にインドでは仏教が大小乗共に滅んだともいえるでしょう。

8 森山清徹 1976「般若経における『廻向』の問題」『印度學佛教學研究』二四（二）、六七〇～六七一頁。